

社会貢献活動

►環境コミュニケーション

【環境配慮方針1-❶】皆さまと一緒に環境に配慮したライフスタイルを考えます
【環境配慮方針2-❷】環境に関して皆さまとコミュニケーションを深めます



取組み方針

地域の人々とともに自然環境とのふれあいを楽しみながら、地域ごとの特性に応じた地球環境や地域の自然にやさしい暮らしを培う場や仕組みづくり等を、地域にお住まいの方々とのパートナーシップにより進めます。

また、ステークホルダーの皆さまと積極的なコミュニケーションを行うことで、真に求められるまちや住まいのあり方を模索し、環境にやさしい持続的発展が可能な都市への再生を進めます。



事例紹介 団地内芝生広場における新たな維持管理手法の試行実施

NEW

令和5年5月、6月、7月と3回にわたり、洋光台北団地（神奈川県横浜市）の芝生広場において「芝生リビング」を開催しました。「芝生リビング」とは、株式会社URリリンクージ、NPO法人育てる芝生-イクシバ！プロジェクトと協働して、地域の方々と一緒に洋光台北団地の芝生広場の手入れを行う取組みです。従来の定型的な芝生の維持管理方法に加え、より良好な芝生を維持するための新たな管理手法を検討することを目的として試行実施しました。

芝生リビングでは地域の方々と共に、雑草取り、芝刈り、水まきや肥料撒きを実施し、初回には雑草等を約16kgも集めることができました。アンケートでは約9割の参加者が「満足」と回答したうえ、さらに雑草取りがとても楽しかったという感想が最も多く集まりました。

全3回の取組みを通して、参加者はべ約60名。幼児や小学生、大学生から80歳以上と参加した世代が幅広いだけでなく、近隣商店の方や外国籍の方にも来ていただき、多様な参加者での様々な交流が生まれました。複数回参加した方の中には「他の参加者との交流を楽しみにしている。」という感想もあり、芝生管理作業の新たな魅力に気づかされるよい機会となりました。3回目では半数以上の方が「今後も芝生の手入れを継続したい。」とアンケートで回答するなど、今後の取組みに意欲的な方が多く見られたことも励みになりました。URだけで管理するのではなく、芝生広場に愛着を持つ地域の方々と共に「みんなで守る」という気運醸成の場となりました。

今後も多様な芝生管理手法について検討しつつ、魅力的な居住環境の維持や新たなコミュニティデザインによる団地の魅力創出を図っていきます。



雑草取りの様子



作業について講習を受ける様子



お住いの方々の交流



作業後のシャボン玉



非電動芝刈り機でみんなで芝刈り

担当者の声

「大変」「面倒」というイメージが強い除草作業をメインにした取組みだったため参加者が集まるか不安でしたが、多くの方々に参加いただけ、「楽しかった」という声も聞けたことでイメージが一変しました。交流を目的に参加する方も多く、芝生広場が持つ潜在的ニーズやポテンシャルを強く実感しました。芝生広場のファンを増やし、芝生広場が良好に維持できるよう取り組んでいきます。

環境に配慮したライフスタイルに向けた取組み



環境に配慮したライフスタイル

災害に強いまちづくり

地域の方々とともに、自然環境とのふれあいや環境にやさしい暮らしを培い、継承していくことを支援したいと考えています。



事例紹介 利便性や住環境の向上と環境負荷低減

緩和策 NEW

UR賃貸住宅にお住まいの方及びその周辺にお住まいの地域住民への利便性向上や居住環境の向上を目的として行ってきた「カーシェアリングサービス」は、環境負荷低減にも貢献している取組みです。

乗り物を利用した移動の際に発生するCO₂排出量は、一人当たりに換算すると、自動車>バス>電車の順であるといわれており、環境配慮の観点からは自動車ではなく、公共交通機関を利用することが望ましいとされています。

カーシェアリング加入者は、加入後に自家用車を手放す人がおり、自動車による走行距離は加入前の約4,000km/年から、約35%減少することは他機関から公表されています。

URでは、これまでに約330の団地に約970台分のカーシェアリングサービスを導入しており、カーステーションは団地内



カーシェアリングサービス

事例紹介 シェアサイクルポートの設置

緩和策

2023年8月1日に東京都世田谷区のフレール西経堂、経堂赤堤通り、シティコート世田谷給田、杉並区のプロムナード荻窪、2023年12月6日に江東区のヴェッセル市場南、ラ・ヴェール東陽町、2024年1月17日に北砂五丁目、大島四丁目団地にシェアサイクルポートが設置（令和6年度3月末時点で、18団地24か所に設置）されました。

これは、お住まいの方の利便性向上、団地の価値向上、低未利用地の有効活用を図るとともに、交通渋滞緩和、CO₂排出量の削減、地域振興を目指して、ポートを誘致したものです。

団地にお住まいの方の利便性向上にとどまらず、広く社会にシェアサイクルが普及することにより、自動車移動の減少によるCO₂削減効果、良好な都市環境の形成の一助、災害時の移動支援となることが期待されます。



フレール西経堂

担当者の声

世田谷区、杉並区、江東区及び運営事業者等の連携によって、8団地に設置することができました。利用者が増え、北砂五丁目、大島四丁目は増設となりました。今後も積極的に導入し、更なる団地の魅力アップを目指していきたいと思います。

事例紹介 団地内EV（電気自動車）充電設備の導入

①EV充電設備利用スペースの設置 ②コインパーキングへの導入

URでは温室効果ガスの排出削減に向けた取組みとして、令和5年11月に哲学堂公園ハイツ（東京都新宿区・中野区）、令和5年12月にすまいる亀有（東京都葛飾区）、令和6年2月にヴェルディール市川南（千葉県市川市）の3団地においてユアスタンド株式会社と連携し、団地内駐車場のご契約者様向けにEV（電気自動車）充電設備を各団地1か所ずつ、試行設置（令和6年3月末時点で、4団地5か所に設置）いたしました。

また、谷津パークタウン壱番街（千葉県習志野市）では、令和5年12月に東武不動産株式会社と連携し、コインパーキング内に充電可能な車室を1か所設置しています。

EVはガソリン車と比較して、走行時の温室効果ガス排出量が大幅に少なく、車体の製造から廃棄までのすべての工程における環境負荷においても、20～30%温室効果ガスの排出量が少ないため、EVの普及によりさらなる温室効果ガスの排出量の削減が可能と言われています。

今後も環境に配慮した取組みの一つとして、EV充電設備の試行設置等を進め、引き続きUR賃貸住宅にある駐車場への設置について、本格展開を検討していきます。



谷津パークタウン壱番街



すまいる亀有

▼詳しく知りたい方はこちら
※参考：環境省ホームページ
https://www.env.go.jp/air/zero_carbon_drive/



UR賃貸住宅にお住まいの方への環境配慮の呼びかけ

バルコニーでの緑のカーテンづくりを支援する等、環境配慮の呼びかけを行っています。令和5年度は、栽培キットや苗を166団地、5,108戸の住宅へ配布・提供しました。



建築物の環境性能の向上

環境性能の向上及び品質確保の促進

建築工事や土木工事等に、施工、工事監理、検査業務に関する技術基準を策定し、それらに則った厳しい品質確保を行っています。また、新規に建設するUR賃貸住宅では「住宅性能表示制度」による第三者評価を取得しています。住宅性能表示の実施について、募集パンフレット等へ設計住宅性能表示を記載し、お客様への情報提供に努めました。



環境に関して皆さまとコミュニケーションを深める取組み

UR賃貸住宅にお住まいの方等とのコミュニケーション

地域やお住まいの方とのコミュニケーション

UR賃貸住宅や地域にお住まいの皆さまと一緒に、ワークショップやイベント開催等を通してコミュニケーションを図り、環境配慮に向けた連携を進めています。

事例紹介 ごみとりサイクルを考える参加型イベント「団地DE古着回収」

令和5年12月、亀戸二丁目団地（東京都江東区）の広場で、環境リサイクルと地域連携による居住者の見守り（環境リサイクル×福祉）に取組むイベント「団地DE古着回収」を実施しました。

今年度、亀戸地域の地域会議で意見の多かった「ごみ問題」「高齢化」「資源ごみ」「廃品回収」をテーマに、古着回収事業者は区の環境清掃部から紹介していただき、その他地域関係者の協力のもと開催に至りました。

同区内の古着回収は小学校などで、月1回拠点回収を実施していますが、今回団地内で開催したことでの総量530kgを回収し、「家の近くで回収してくれて助かる」「今度はいつやるの？」との声が寄せられました。当日は老若男女、国籍問わず幅広い方々から古着の持ち込みとイベントへの参加があり、SDGsへの関心の高さがうかがえました。

担当者の声

- 男性の来場も多く、男性を地域コミュニティへつなぐ仕組みづくりなど、今後の取組みの発展と他団地への横展開が見込まれます。
- 外国籍の方が増加する団地では、外国籍の方からの「ごみの捨て方がわからない」という声が多く、課題となっていますが、外国籍の方の参加もあり、取組み方法の工夫で課題解決につながるヒントを得ました。



回収された古着



暮らしの相談（地域包括支援センター）など他のイベントも同時開催



事例紹介

リサイクルを通じたコミュニケーションの醸成

緩和策

NEW

高津団地内（千葉県八千代市）のコミュニティ拠点では、イベントや普段の会話などを通じて、お住まいのお客様とコミュニケーションがとれる取組みを推進しています。そんな中、お客様からリサイクル等、環境負荷低減の取組みに関心がある、社会の役に立つ取組みに参加したい、といったお声を多数いただきました。

そこでペットボトルキャップのリサイクルに着目。民間企業と連携し、令和5年7月よりコミュニティ拠点で、お客様からの持ち込み受付を開始しました。ペットボトルキャップはリサイクル可能な資源なのですが、その回収率は1ケタ台といわれるほど、リサイクルが進んでいない現状があるようです。

開始後、すぐに多くの方にご参加いただき、結果としてコミュニティ拠点の来訪者が平均50名／日から70名／日と約40%増加、ペットボトルキャップは90日間で約8,000個集まりました。また、回収後の活用方法や、ペットボトルキャップ以外の品目のリサイクルの可能性等、環境に関してお住まいのお客様とコミュニケーションを深めることができました。

今後はお客様と回収した資源をどのように還元するかを民間企業と連携して検討し、お客様がより楽しくリサイクルに参加いただけるような仕組みづくりを行う予定です。

担当者の声

回収を開始して、多くの方から、環境に配慮した取組みがしたいけれど回収拠点が家から遠い等の理由で行動できずにいた、というお声をいただきました。URだけでなく自治体や民間企業と連携することで、暮らしに近い団地だからこそできる環境への取組みについて、可能性が広がると思っています。

事例紹介

環境をテーマにしたイベントの開催

緩和策

NEW

令和5年6月、東坂戸団地（埼玉県坂戸市）で「ものや出来事、スキルなどをシェアすることで、今よりもちょっといい暮らしの実現を目指す」ことをテーマにしたイベント、「くるくる団地 in 東坂戸」を開催しました。

本イベントは、東坂戸団地に興味を持つ事業者の方々が、団地施設の活用による事業化の可能性を探るための実証実験を兼ねて実施されました。

スケルトン状態の空きテナントを活用して、不用品買取・リサイクルを営む事業者が「お片付け・不用品買取相談」と「リサイクルショップ」を開催したり、「廃材アートワークショップ」では、廃材を利用したキーホルダーなどの製作に子どもたちが真剣な顔で取り組むなど、多くの来場者でにぎわいました。

本イベントは、環境負荷の少ない歩行や公共交通機関での来場を促すなど、環境に配慮した点が評価され、坂戸市の「環境配慮チャレンジ認定イベント」にも認定されました。

今回はイベントを通して、新たに東坂戸団地の活性化に関わってくださる方々と出会うことができました。今後も「くるくる団地」として環境への貢献を意識しつつ、さらに東坂戸団地に関わる方々の輪を広げていきたいと考えています。

担当者の声

イベントでは環境配慮というテーマをあえて全面に出さず、イベントに楽しく参加する中で、実は環境配慮につながった活動をしているということを意識しました。多くの小学生がアートワークショップに参加してくれたり、高齢の方方がリサイクルショップをゆっくり眺めてくださったり、日常に溶け込んだ環境配慮イベントになったのではないかと思います。



多世代の方でにぎわう様子



不用品買取相談・リサイクルショップ



廃材アートワークショップ

URでは7月から8月にかけて「DANCHIつながるーむ～夏休みは団地で楽しもう!～」と銘打ち、夏休みの子どもの居場所提供や共働き世帯などの子育て負担の軽減の一環として、大阪・兵庫の8団地の集会所などで、防災やリサイクルなどの学び・遊びの講座や自習室開放を行いました。

その中で、UR-DIY部※は、中宮第3団地(大阪府枚方市)とシャレール東豊中団地(大阪府豊中市)で、団地から排出された廃材を活用してSDGsをテーマに「時計づくりワークショップ」を実施しました。

当日は、SDGsについての紙芝居とクイズを行い、参加者にはURから「SDGs認定証」を贈りました。環境問題やリサイクルの重要性を学んだ後、団地で使われていた床や外壁タイル、鴨居などの廃材を再利用した時計作りを行いました。廃材を重ねて立体的にしたり、組み合わせて数字を作ったり、子どもたちのオリジナリティ溢れる時計が完成しました。

子どもたちからは「授業で学んだ、SDGsに向けた体験が実際にできて良かった。」との声がありました。

※「ココロが動く仕事を、自らの手で」をコンセプトに「URの未来をクリエイトする」様々なモノづくりに取り組むUR西日本支社若手有志職員を中心とした部門横断組織です

担当者の声

ワークショップに参加いただいた子どもたちからは、「色を塗れたり、飾り付けができたりして楽しかった!」、「出来上がった時計を褒めてもらえて嬉しかった!」という喜びの声が次々と寄せられました。今回のワークショップを通して実際に子どもたちや団地にお住まいの方々に関わったことで、皆さまの地域愛や地域コミュニティの大切さを実感することができました。



時計作りで使用した、団地から排出された廃材



特別授業の様子



記念撮影の様子

海外展開にあたってまちづくりや住まいづくりのノウハウ等を活用

まちづくりや住まいづくりのノウハウ等を活用した環境配慮の提案

URが蓄積してきたまちづくりや住まいづくりのノウハウ等を活用し、関係府省、我が国事業者及び関係公的機関との連携を進めることで、我が国事業者の参入を促進し、環境に配慮した提案の実現に向けて働きかけています。

事例紹介 国際ランドスケープアーキテクト連盟アジア太平洋地域会議 2023における港北ニュータウンの現地視察

国際ランドスケープアーキテクト連盟アジア太平洋地域会議2023が、11月に日本で23年ぶりに開催されました。本会議では、「Living with Disasters 自然とともに生きていく」をテーマに、グリーンインフラ(自然を生かした社会的な共通資本の整備)、ウェルビーイング(自然とともに暮らす幸せな生き方の探求)、ランドスケープカルチャー(地域の自然に根ざした文化と歴史の継承)という3つの目標について議論されました。

本会議の翌日に「郊外のリアルを廻るウェルビーイングツアー」が開催され、URが整備した港北ニュータウン(神奈川県横浜市)の視察会が行われました。

視察会当日は、港北ニュータウン開発の基本方針であるグリーンマトリックス※の考え方を中心に、現地の概要について説明し、事務局及び会議参加者(出身国はタイ、フィリピン、マレーシア、中国など)の総勢12名とともに現地を歩きました。参加者から、「この樹林はどうやって維持されているのか?」といった質問や、逆に「私たちの国ではこうやっている」といった説明もあり、歩きながら活発な意見交換も行われました。

ツアー終了後には、参加者からとても良かったとの感想を多数頂戴しました。今回の視察によって、日本の優れたランドスケープ事例を、アジア各国からの参加者に体感していただけたものと考えています。

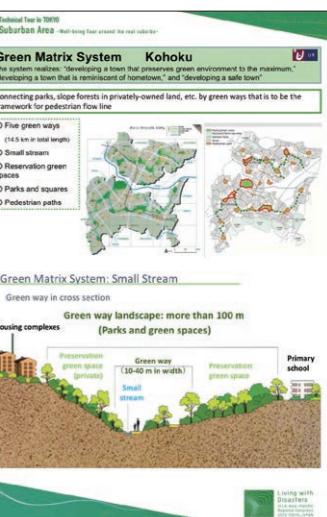
※地区内の緑道を主骨格とし、集合住宅、学校、企業用地等のスーパー・ブロックの斜面樹林や屋敷林など民有の緑を、公園緑地等の公共の緑と束ねて、連続させ、さらに歴史的遺産、水系なども結合させて再構築し、地区全体の空間構成の要としたシステム



幅100m以上にもなる緑空間について説明



自然湧水によるせせらぎ



グリーンマトリックスシステム



参加者から母国での処置方法について説明いただく様子

担当者の声

参加者はランドスケープの専門家などが多く、非常に高い関心を示していただいたのが印象的でした。自社が国際的にも評価されるまちづくりを行ってきたことは、職員として誇らしいと思うと同時に、今後のまちづくりにおいても世の中に求められるまちづくりを進めていかなければ、身が引き締まる思いを新たにしました。

▼詳しく知りたい方はこちら

UR×グリーンインフラ事例集 (P.14)

<https://www.ur-net.go.jp/aboutus/action/greeninfra/lrmph000001cl4-att/lrmph000001e24.pdf#page=14>



循環共生型都市開発等へのニーズに対する支援

我が国事業者等の連携体制構築支援や海外展開にあたっての技術支援、専門家派遣等の人的支援を通して、アジア等の新興国において急速に高まる循環共生型都市開発等へのニーズに対する支援を行っています。

事例紹介 インドネシア ジャカルタ首都圏におけるTODプロジェクトの推進

インドネシアは経済成長が著しく、都市部に多くの人口が流入しジャカルタは東京と同等の人口規模となっています。一方で、自動車の排気ガスが原因とみられる大気汚染が深刻化しているとともに、世界最悪クラスとも言われる交通渋滞が常態化しており、交通インフラを含むインフラ整備の遅れが国の更なる発展への大きな足かせとなることが危惧されています。

この課題解決のために、令和元年には日本の支援によってMRT (Mass Rapid Transit : 日本の地下鉄に相当) がインドネシアで初めて開業(約15km、13駅)しました。URは、ジャカルタでMRTの建設・運営及び駅周辺開発の主導的な役割を担っているジャカルタ都市高速鉄道公社(MRTJ公社)と令和5年7月に協力覚書を交換しました。現在もMRTの整備・延伸が続いているジャカルタにおいて、自動車に依存しない、MRT等の公共交通を中心としたまちづくりを通じて、日本企業の更なる事業機会の創出とインドネシアにおける社会課題の解決への貢献を目指していきます。

担当者の声 URが日本で数多く手掛けてきた鉄道駅を中心とし、歩行者に優しいまちづくりへの期待を強く感じます。URの持つノウハウが国内だけでなく、インドネシアの環境問題解決にも貢献できることを嬉しく思います。



MRTJ公社との覚書交換 (UR中島前理事長)

震災復興支援における地域活動支援

地域の有志による景観づくり・コミュニティ形成の活動支援

URは、地域の方々の主体的な活動を支援し、震災前の景観の再生、コミュニティ形成・担い手創出による関係人口拡大、地域の活性化を目指しています。

事例紹介 KUMA・PREお花プロジェクト

令和5年6月に福島県大熊町の地域活動拠点KUMA・PREで「KUMA・PREお花プロジェクト」が始動しました。この活動は「震災前の花いっぱいの大熊町を取り戻したい」という町民の想いから始動した地域の有志による活動で、花木をKUMA・PREで育て、将来町の各地に植樹することを目指して活動しています。URは地域の方々の主体的な活動の場としてKUMA・PREの屋外スペースを提供しているほか、施設管理の一環として日常的な花壇の管理を支援しています。この活動を推進している渡邊さんは、県内のつじ園の当主を務める傍ら、花を使った復興まちづくりの活動を展開しており、日ごろからKUMA・PRE花壇の花の状態などについて密に連絡を取りながら一緒に活動を進めています。また、地域の方々と育てた花の活用の一つとして、花から抽出される「花酵母」を使ったお酒づくりにも挑戦しています。

現在、活動は月に1回程度開催されており、町民のほか町内の企業で働く方、さらに復興の力になりたいと大熊町に訪れる学生が活動に参加しています。地域の方々と協働で花植え活動を推進することで、地域のコミュニティ形成や担い手創出、そして町の景観形成、緑化推進に寄与していきます。



7月の活動後の集合写真



活動の様子

担当者の声 月に1回の花植え活動が町に関わる方々の交流の場となっており、発起人の町民の方々も「皆で大熊の景色をつくれていることが嬉しい。」と話しています。花いっぱいの大熊町になることを目指し、地域の方々とこの活動を育てていきたいです。

民間事業者等との連携

民間事業者等との連携の実施

民間事業者と連携し、緑地の確保や省エネ機器の設置等環境への配慮を呼びかけるとともに、開発計画書等により環境配慮対策の把握に努めています。

事例紹介 世界初の郊外住宅地における空中配送ロボット自動配送システムの実証実験

URは、パナソニックホールディングス株式会社、東急株式会社と、世界初となる郊外住宅地における空中配送ロボット技術を活用した新たな配達サービスの実証実験の実施、及び本実証実験を活用した持続可能なまちづくりの推進に向けて令和5年10月13日に連携協定を締結し、11月から虹ヶ丘団地(神奈川県川崎市)において本実証実験を開始しました。

本実証実験は、団地内に専用柱を設置し、ワイヤロープに空中配送ロボットを吊り下げ、住民の方が専用アプリから、東急ストアや吉野家などの商品を注文すると、最短30分で団地内の受取場所にある受取ボックスまで、配送ロボットが空中的ワイヤロープをつたって商品を届けます。ドローン配達より安全性、静音性が優れ、省エネであることから既存住宅地での運行に適しています。

本実証実験を通じ、配達業界における人手不足や配達コストの上昇といった社会課題の解決や、少子高齢化が進行する郊外住宅地における買い物の利便性向上を目指します。

また、空中配送ロボットにより商品が届けられる受取場所に人が集い、外出や交流の機会が創出されることによるウェルビーリングの向上や、コミュニティの形成による地域活性化が期待されます。

サービスを利用された住民の方からは、「受取ボックスを増やしてほしい」「自宅まで運んでほしい」「もっと色々な商品を運んでほしい」など前向きな意見を多くいただきました。

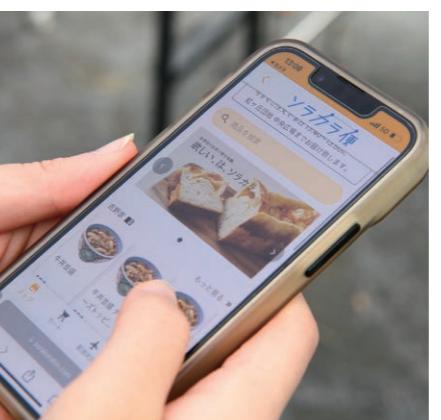
URは今後も、行政や民間企業と連携した持続可能なまちづくりの推進、団地を活用したにぎわい・交流の創出やコミュニティ形成及び地域活性化に取り組んでいきます。

担当者の声

本実証実験が開始間もないですが、既存郊外住宅地において、高齢者の方をはじめ、子育て世代を含む幅広い年代から、買い物がよりやすくなるとの期待を多くいただき、本実証実験の意義をあらためて感じました。居住者の要望を受けて開催されたアプリ注文講習会に多くの高齢者が参加され、スマホの利用やキャッシュレスへの不安が軽減することにもつながりました。



受取ボックス



商品注文は専用Webアプリから



実証実験の様子



空中配送ロボット



アプリ注文講習会



商品を受け取る様子



社会貢献活動

社会貢献活動の実施

様々な社会貢献活動を実施しています。

事例紹介 「だれでもかんたんSDGs ちいさくたってリサイクル」エコキャップ回収活動

職員一人一人がSDGsを身近に感じ、日々実践できる取組みとして、職場全体でのエコキャップ回収活動を実施しています。

ペットボトル飲料のキャップの回収により、環境への貢献だけでなく、発展途上国の医療支援、リサイクルの過程での雇用創出等にもつながるなど、環境、資源、福祉といったSDGsのテーマに、誰でも簡単に参加でき、社会貢献できる取組みであることから、職員からの発案を受けて開始したものです。

活動を始めるにあたっては、各職場での主体的な参加を目的に、まずは関心をもっていただるために、職員にも意見を募って選定したキャッチフレーズ「だれでもかんたんSDGs ちいさくたってリサイクル」を合言葉に、協力を呼びかけました。

いざ活動を開始してみると、すぐにたくさんのキャップが集まり、想像以上に積極的な協力が得られています。ぎっしりとキャップがはいった袋を自宅から笑顔で持参する職員や、「職場で身近にエコ活動に参加できて嬉しい」という声も。また、職場

ごとの回収量の見える化を図る工夫を行ったことなどで、相互に意識が高まり、社内の交流のきっかけにもなっています。

そのほかにも、職場で簡単にできる省エネの取組みとして、マイボトル・マイカップの推奨や使用していない区画の消灯、OA機器の待機電力削減などに取り組んでいます。

担当者の声

たくさん集まったキャップが、皆のあたたかい気持ちの集まりのように思えます。「ちいさなことから大きな変化は始まる」と信じ、自身の業務の中で、環境やリサイクルに関してできることについての視点を持ち続け実施していきたいです。

事例紹介 UR職員有志による地域向けイベント・清掃活動の実施

URでは、UR本社が所在する神奈川県横浜市の北仲通南地区において、職員の有志が「Open Kitanaka-minami Project(通称:OKP)」として、エリア価値向上の検討・実践のための様々な活動をしています。

横浜市役所をはじめとした周辺の関係者と連携して、地域の方向けのイベントを実施しました。5月には長野県茅野市及び栃木県鹿沼市、10月には大阪府堺市のご協力を得て、URがまちづくりのご支援をしている地方公共団体のPR活動のほか、VR体験といった新たな取組みにも積極的にチャレンジしています。

また、毎月月末に本社周辺の清掃活動を行っています。同じジャケットを着用して定期的・継続的に実施することで、地域の方からも認知されるようになりました。今後も、エリアへの来訪者や近隣の皆さまがURに親しみを持っていただけるような活動を進めるとともに、まちの環境維持に貢献します。



秋のイベントでは、多くの方が特設の芝生広場で自由にくつろいでいました

▼詳しく知りたい方はこちら

横浜アイランドタワーで「UR×北仲 YOKOHAMA i・LAND PARK 2023」を開催しました!
https://www.ur-net.go.jp/news/20230612_honsya_yokohama.html



清掃活動の様子

▼詳しく知りたい方はこちら

10月21日、22日にUR×北仲 AUTUMN FESTA 2023を開催します!
https://www.ur-net.go.jp/news/20230928_okp.html



NEW



✓

ここにいれるのは
飲料ペットボトルのキャップのみ

令和5年9月に「URまちとくらしのミュージアム」が開館

ヌーベル赤羽台(東京都北区)の保存街区の一角に、都市の暮らしの歴史を学び、未来を志向する情報発信施設である「URまちとくらしのミュージアム」が令和5年9月に開館しました。

このミュージアムは、令和元年に国の登録有形文化財(建造物)に登録されたスターハウスなど4棟と新築展示施設(ミュージアム棟)の計5棟から成る情報発信施設となっており、ミュージアム棟には、同潤会代官山アパートをはじめとする4地区6戸の「復元住戸」を集合住宅歴史館(東京都八王子市)から移築・復元する他、都市と集合住宅の暮らしの歴史や変遷等を紹介する壁床4面スクリーン投影による映像展示、模型やパネルを整備しています。

また、株式会社Open A 馬場正尊氏をプロデューサーに迎えて、当ミュージアムを、単なる情報発信施設ではなく「まちづくりの実践場」と位置づけ、ミュージアムを中心に、赤羽駅周辺地域全体をフィールドとして、URの事業活動を情報発信していきます。



1F URシアター



ミュージアム外観

▼詳しく知りたい方はこちら

URまちとくらしのミュージアム公式ホームページ
<https://akabanemuseum.ur-net.go.jp/>



▼詳しく知りたい方はこちら

URまちとくらしのミュージアム紹介動画
<https://youtu.be/CwhdYraWbc>



URひと・まち・くらしシンポジウム

URでは、「URひと・まち・くらしシンポジウム」を毎年開催し、有識者をお招きした講演やパネルディスカッションを通じて、社会的課題を踏まえたこれからの時代のまちづくりや、新たな暮らし方等を議論するとともに、URが取り組む事業・技術研究の報告を行っています。

令和5年度は「都市の暮らしの歴史を学び、未来を志向する」をテーマに、10月26日に会場開催・LIVE配信を行い、一般の皆さま約500人にご参加いただきました。



職員研修及び外部評価



職員の環境意識の啓発活動

セミナーやレポート、社内研修等を通して、職員の環境意識向上を図っています。令和5年度は、外部講師を招いた断熱勉強会等を開催しました。

都市環境セミナー

第1回

「再エネの創出と地域全体での脱炭素化の取組」

講師

株式会社球磨村森電力

代表取締役 中嶋 崇史 氏



第2回

「フューチャー・デザイン

—将来世代の視点で考える 持続可能社会と新たなイノベーション—

講師

大阪大学 大学院工学研究科

教授 原 圭史郎 氏



第3回

「建築物のエンボディドカーボンについて」

講師

武蔵野大学 工学部 サステナビリティ学科

准教授 磯部 孝行 氏



URの環境配慮活動に対する外部評価

URの環境配慮活動において、社外システムによる評価アンケートを約2週間実施した結果、9割の方から高評価をいただきました。引き続きURは環境配慮活動に取り組んでいきます。

URの環境配慮活動に対する外部評価

約9割の方が

好感がもてると評価

UR都市機構の
環境配慮活動への
好感度
(n=12,934)

87 %

※UR都市機構の環境配慮活動を認知している方に聴取